説教批評・説教分析について

2009 年 9 月 14 日　吉村和雄
2026 年 6 月 21 日 改訂
［ ］内は原著のテーゼ番号

Ⅰ　説教批判の問題は何か

・急所を衝く説教批判の難しさ → 説教者が説得されない。［1.13③④、1.44］
説教批判がまとまらない。

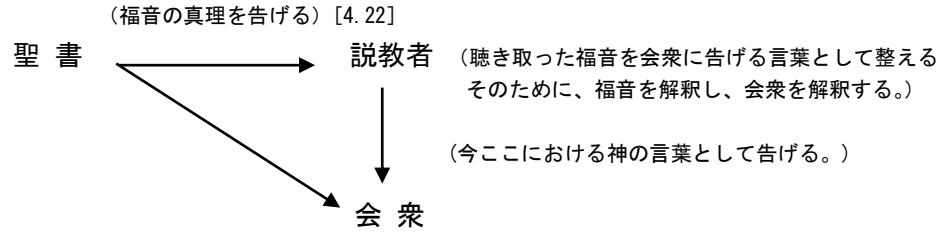
・塾生が、説教批判に習熟する必要がある。→ 自己に対する批判的な眼差しが必要［1.45①③］

Ⅱ　説教とは何か。正しく語られた説教においては、何が起こるのか

①聖書が告げる福音の真理（罪に対する審きとその赦し）を、
説教者が、今ここにおける神の言葉として、会衆に告げる。［1.36③p21、4.21］
↓
②それが会衆に通じた時に、その存在が揺さぶられ、悔い改めて神を礼拝するようになる。［1.35］
↓
③礼拝共同体としての教会が形成される。［1.36］

・説教者は、これらの出来事が起こることを願いつつ、説教の言葉を整える

図で表すと



従って、ここにおいて説教者が問われることは

①聖書が告げる福音の真理を正しく聴き取り、解釈しているか
②会衆を正しく捉え、解釈しているか。
③聴き取られた福音が、今ここにおいて会衆に告げられるべき神の言葉として、ふさわしく整えられ、告げられているか。

Ⅲ　説教の持つ諸要素（上記③に関して）

1　構造を持つ

(1)　論理的構造

①福音を告げ、説得するための論理的構造［4.32］

説教には、救いの出来事を証言し、悔い改めを求める。それを通して、救いの出来事を起こすための論理構造がある。

②会衆に対する牧会的対話の姿勢が生む対話的構造［4.33-35］

説教は、会衆との間に信頼関係を作り出すためのパラクレーシスの言葉である必要がある。そのために、説教は、牧会的対話の構造を持つ。説教は、ひとりで語っていても、モノローグではない。

(2) 時間的構造 ［4.43］

①スリーポイント型の構造

三段論法で説得するための論理構造。英語圏の説教では、長らく主流であった。

②ダイナミックな言葉の流れとしての構造

帰納的説教の方法や、そのひとつの結果としての物語説教においては、説教が、時間と共にダイナミックに動く言葉の流れであると理解するようになっている。

2 鍵になる言葉を持つ［4.51～53］

説教は、真理を語る説教にふさわしい真理表現の言葉を持つ。それが、鍵になる言葉。この言葉が、説教を構造化している場合が多い。この「鍵の言葉」が見つからない説教は、構造もメッセージも不明確でわかりにくい。

3 「４つの言葉」を持つ

説教は基本的に以下の４つの言葉から成っている。それらすべてを備えているとは限らないが、「神の名による言葉」は、必ずなければならない。

①聖書の言葉［4.72 3), 5.31-34］

説教者が、聖書の言葉をできるだけ忠実に現代の言葉をもって伝えようとするところに生まれてくる言葉。この言葉は、説教と聖書との関わりを示す。この関わりの仕方によって、即テキスト説教（textual sermon）、講解説教（expository sermon）、主題説教（topical sermon）などに、分類される。聖書を直接の題材としない説教においても、聖書との関わりを問うことは不可欠である。

②説教者の言葉［4.72 1), 5.41-45］

説教者が自己固有の言葉を語ろうとするところに生まれてくる言葉

説教は全体が説教者の言葉であるが、際だった形で、他の 3 つの言葉と区別される説教者の言葉がある。

内容的には、個人としての説教者の言葉と、説教者としての職務から生まれる言葉（告知する言葉、教える言葉）がある。

方向としては、聴き手と共に神の言葉を聴いている者としての言葉、すなわち教会共同体の言葉を自分の言葉として語る言葉と、聴き手に向かって真理を語る言葉がある。

わたし、わたし共、わたしたち、あなた、あなたがた、皆さん、などの一人称、二人称の代名詞が用いられるが、それが実際に誰を意味しているかは、その時々に違う。（特に「わたし共」「わたしたち」などの一人称複数を表す言葉）

③聴き手の言葉［4.72 4), 5.51-53］

説教者が、教会の人々によって理解されるために言葉を整えようとするところに生まれてくる言葉。これは聴き手が生きる世界から得られた言葉、聴き手の生活になじんだ言葉である。

いわゆる例話もこれに含まれる場合が多い。これがなければ、話が通じない。この言葉によって、説教者が聴き手の現実をどのように解釈しているかがわかる。この言葉の意図と、それが説教の中でどのような役割を果たしているかを知ることは重要である。

④神の名による言葉［4.72 2), 5.21-24］

説教者が、自らの言葉を神の言葉として聴かれる言葉にしようとするところに生まれてくる言葉。これは説教者が権威をもって福音を告知する言葉である。この言葉は、聖書の言葉、説教者の言葉、教会の讃美告白の言葉としても語られる。これがなければ、説教ではありえない。この言葉は説教者の神学を示す。個人の言葉ではなく、教会の言葉になっている必要がある。この言葉については、以下のことが問われる。

①いかなる神を語っているのか

②聖書的根拠を持っているか

③教会の教えに基づくものか

④正しく福音を語っているか

4　固有の語り口を持つ

説教の言葉は、説教に与えられた使命から要求される固有の言語、概念、文体、言葉遣い、語り口を持つ。その特色は［5.63-64］

①語られる言葉であること

②一定の教会共同体において語られること

③真理表現であること

④対話的、説得的であること

⑤福音にふさわしいこと

また、そこで使用される概念、表現方法に関しては、［5.65］

①教会の教えの表現として、確定した教会的概念を使用すること

②現実に生きる相手に届く、現実的な真理の表現であること

③見えない神の現実、その神との見えない交わりを表現するものであること。すなわち、象徴的表現、メタファーになる。

Ⅳ　説教分析の方法

1　説教を聴く（原稿だけの場合は音読する）

礼拝の場で起こる出来事に、できるだけ接近し、真相を解明する。［3.21, 3.22］

聴きながら、最初の出会いの体験（第一印象）を記録する。そこで起こる反応の過程を把握し、吟味する。プラスの反応とマイナスの反応、理解できたか、できなかったかなど。具体的には

よくわかる、おもしろい、賛同する、ひきつけられる、感動する［3.23 e)］

わからない、退屈だ、反発を感じる、腹が立つ、躓く

聴きながら受ける第一印象と、聴き終わった後に残る第一印象がある。［3.23 f)］

第一印象には、聴き手の感情、意志、理性など、全存在が関わる、聴き手の内的活動の出来事である。［3.23 j)］

第一印象を生むのは、説教であるが、聴き手自身も関わる。それ故に、聴き手のあり方もまた、分析対象となる。（この点が、文学作品の分析とは異なる。）［3.23⑤⑥］

2　基本的な問

基本的な問は、以下の３つである。

①説教者はここで何をしようとしているか。［P65 ③］

②その結果、どのような出来事が起こったか。

③どうしてそうなったか。

例えば、最初の問と答えは、以下のようになるだろう

①説教者はここで何をしようとしているか。

答え：聖書の告げる福音の真理を、今ここにおける神の言葉として告げること

②その結果、どのような出来事が起こったか。

答え：第一印象として記録されたこと

③どうしてそうなったか。

（ここを問うことから、分析が始まる。）

3　分析の方法［4.12①, 4.21］

機械的に適用できる方法はない。訓練によって、分析の基本を身につけ、応用を学ぶしかない。

前記③の問に対する答えを見つけ出す感覚を養うことが必要。大切なのは、説教者がどこに立って何をしているかを感じ取ること。説教者の立ち位置に問題（あるいは特色）があるのか、それとも、していることに問題（あるいは特色）があるのか。具体的には

・聖書から福音の真理を聴き取る過程に問題（あるいは特色）があるのか。［2.31 ④］

・聴き手を捉える捉え方に問題（あるいは特色）があるのか。

・説教の論理構造、時間的構造に問題（あるいは特色）があるのか。

・鍵になる言葉は明確か

・四つの言葉、特に「神の名による言葉」がどこで、どのように語られているか。

・語り口に問題（あるいは特色）があるのか。

これらの点について、説教者の立ち位置と、説教者がしようとていることとの関係を吟味した上で、その問題（あるいは特色）を際だたせるような分析方法を用いる。具体的には

①説教の論理構造を明らかにしてみる。［4.23］

②四つの言葉（分析素）を色分けしてみる。

③鍵になる言葉を見つけ出してみる

④説教全般の言葉、語り口を分析してみる

もうひとつ、説教を聴きながら、そこで受けた第一印象を記した箇所について、以下の考察をしてみる。

①説教者ここで何をしようとしているか。

②自分がそのような印象を受けたのは、なぜか。

③そこから、説教者と聖書と関係、会衆との関係について、何が見えてくるか。

この最後の問を深めていくことによって、説教者の教会の状況、説教者の福音の捉え方、また説教者自身の心理的な問題までが明らかになることがある。